



# フィリピン セブでみた現実 ー学びから行動へー



## テーマ：格差の構造を問い、未来への可能性を考える

メンバー

### 【学習の流れ】



- 石橋 昂征 田中 悠樹 叶 瑠華
- 井上 凜南 永森 愛衣 坂内 一駿
- 紺野 愛実 西田 萌愛 高山 未来
- 堺 健太郎 林 滉太郎 永井 駿
- 澤田 優梨 藤井 勝真 中山 純輝
- 高塚 彩愛 新垣 凜 高木 萌衣
- 道佛 和歩

### 【授業の目的・目標】

- ①グローバル化の視点で国家間や各国内における経済格差のメカニズムを理解する。
  - ②エンパワメントアプローチやストレングス視点を活用した、持続可能なコミュニティづくりの要点と教育・福祉との関連を学ぶ。
  - ③子どもたちの知的好奇心を育み探求心を高めるための教育手法を理解する。
  - ④地域の人々とコミュニティの持続可能性と活性化に向けた課題と解決のための方策を共有することができる。
- 活動を通して「社会に能動的に貢献する姿勢」「多様な文化やその背景を理解し受け容れる能力」「問題発見・解決力」「コミュニケーションスキル」を身につけていく。

まとめ動画



### 【事前学習】

オンライン学習でフィリピンについて知るために、動画を見てセブ島の文化などの知識を学んだ。日本と海外の文化や価値観の違いや貧困問題について学び、持続可能な社会実現に向けての模索した。また、小学校の授業内容の構成を作っていく際に私たちが授業をすることによって、現地の子どもたちに何を伝えることができるかについて意識を置き、話しあった。また、現地に寄付出来る服などの収集を行い、フィリピンへ行く準備を行った。

### Hop：理解する

**現実の違い：**「当たり前」が保障されていない生活 フィリピン・セブで目の当たりにしたのは、フィリピンのスラム街では、生活の基盤である水・電気・住居が十分に整っていない。舗装されていない道にはゴミが散乱し、道端で眠る子どもたちの姿があった。日本では「当たり前」のように思える生活条件が、ここでは贅沢なものとなる。例えば、水道水をそのまま飲むことができないため、飲料水を確保するにはお金がかかる。家族が最低限の生活を維持するために必要な収入と支出が釣り合わず、結果としてスラムの生活から抜け出すことが困難になる。これは単なる貧困ではなく、社会構造が固定化している「**格差の問題**」である。

**問題意識：**「知っている」ではなく「知っているつもり」だったというのが実感できた。実際に現場を訪問し、目の当たりにしなければ重要性のある情報に気付けない。スラム街での訪問、パディーとの交流、子どもたちのまなざし、そのすべてが、机上の学びを超えた気づきを与えてくれた。「**知る**」ことの責任とは、**目を背けずに向き合うこと**なのだ痛感した。社会的価値観が、人々の自己認識を左右する力を持っていることに気付かされた。このような「現場の実感」を得ることこそが、問題に本気で向き合う第一歩だと考えるようになった。



ゴミ山 スラム街等の動画



### Step：実践する

**現場でのリアルな経験：**社会の構造が人々の暮らしにどのような影響を与えているのかを知るため、リハビリセンター、スラム街、フィリピン大学などを訪れた。薬物更生施設では「**貧困が犯罪を生む**」という現実を突きつけられた。そこにいた若者たちは「生きるために盗むしかなかった」と語る。格差が生む選択肢のなさが、彼らの人生を左右していた。また、LGBTの子ども沢山あり、日本に比べ生活に溶け込んでいるように感じた。現地の方たちはフレンドリーに接してくれていたが、韓国人や中国人であっても、日本人に対してのみであった。

**パディーとの交流：**「狭くて汚くてごめんね」と謝る私のパディーは、家庭を見せることにためらいを感じていた。「狭くて汚くてごめんね」と何度も繰り返すその姿に、**社会が作り出した劣等感の存在**を実感した。しかし、彼女の家は「汚い」のではなく、そこには**家族の温かさや努力などが隠れているのではないかと感じた**。社会の価値観が、人々の自己認識を歪める力を持っていることを学んだ。

**課題の現実（児童搾取、人身売買、教育の不足）：**「子どもの未来を守る」という当たり前の価値が、この場所では脆弱だった。ソーシャルワーカーの話や、グローバル化の影響を受けたオンライン上の児童搾取や人身売買の現状に強い衝撃を受けた。教育が十分でない環境では、子どもたちが「知る」こともできず、選択肢すら持っていない。

### Jump：発展させる

**持続可能な支援の考え方：**支援とは単に何かを与えることではなく、共に考え、共に築いていくこと。短期的な援助ではなく、**地域の人々と協力しながら、根本的な問題の解決につながる支援**が求められる。特に、現地の文化や価値観を尊重しながら、彼ら自身が持続可能な変化を生み出せる環境を整えることが重要だ。例えば、教育支援では「単に図書館を作る」「教材を寄付する」といった表面的な援助ではなく、現地の教育者と協力し、地域に根ざしたカリキュラムを構築することが鍵となる。持続可能な支援には、**現地の人々が自ら問題に向き合い、「解決策を生み出せる力」**、具体的には柔軟な思考と創造的な発想が必要だ。また、地域経済の活性化も重要な支援のひとつである。職業訓練を提供し、地元の人々が安定した収入を得られる仕組みを作ることで、支援依存ではなく、自立した地域づくりが可能になる。支援の目的は、「**困窮している人々を助ける**」ことではなく、「**彼ら自身が変化を生み出せる力を持つ環境を作る**」ことにある。

**日本社会への応用：**「目に見えない格差」にどう向き合うかフィリピンでの学びは、日本の社会にも応用できる。日本にも教育機会の格差があり、貧困世帯の子どもたちは進学の実績が限られている。また、都市と地方の格差も顕著であり、地方では質の高い教育資源へのアクセスが困難な場合がある。フィリピンでの経験を踏まえ、日本においても「**機会の均等**」をどのように確保するかを考えることが重要だ。単に制度を整えるだけでなく、「知る」「考える」「行動する」機会を提供することで、社会構造そのものを変えていくことが求められる。

**未来への可能性：**「学びを生かし、社会の変化を促す」この経験を経て、「知るだけで終わらせない」という意識が芽生えた。格差や支援の現場は、一人では解決できないほど大きな課題だ。しかし、「**学びを共有し、多くの人を巻き込むこと**」で、**社会全体に影響を与えることは可能**である。具体的な行動として、現地で学んだことを発信し、教育や支援の在り方を問い直す議論の場を作ることが考えられる。自分の経験を通じて、「何が問題なのか?」「どんな解決策があるのか?」を広め、社会の意識を変えていく。その積み重ねが、大きな変化につながることを確信している。

# フードフィードィング

## 【気づき】

子どもたちの食事の受け取り方にはさまざまな違いがあった。笑顔で何度も来る子、静かに受け取る子、ご飯を持ち帰る子、なにも持ってこずただ待っている子、それぞれの行動には理由があるはずだ。特に、高学年は低学年を優先するかのよう自らもらいに来る子は少なかった。家庭の状況や食文化、食事への考えなどが影響しているかもしれない。また、食べるのが当たり前ではない環境で育った子どもは、**食事を受け取ることに特別な思い**を持っていることが多いと感じた。ご飯を持ち帰る子は、家族と分け合うためなのか、後でゆっくり食べるためなのか、一人ひとりに異なる背景があることを理解し、決めつけずに寄り添う姿勢が大切だと気づいた。

他にも、「順番」という概念がありません。列に割り込む子どもに対して注意をしようと何がいけないのかが理解できていなかった。

## 【課題】

子どもたちと本当に向き合うためには、表面の行動だけでなく、その背景にある**気持ちを理解**することが必要である。ただ食事を渡すのではなく、子どもが安心して受け取れる環境を作ることが重要である。現地の文化や価値観（何を大切にしているのか）を尊重しながら支援を進めることで、子どもたちが「助けられている」という感覚ではなく、自然な形で関わることができるようになるのではないかと。さらに、子どもが自分から話しかけられない場合は、こちらから関わることで心の距離を縮めることができるであろう。

また、現地の人は手で食べるため、なぜ手を洗わなければいけないのかを説明する必要があります。また、

目の前にある一つの事実のはどのような過程があったのかを想像すること、今後は、**柔軟な視点**を持ち、**一人ひとりの気持ちに寄り添いながら支援**を続けていきたい。

## FOODFEEDINGの動画



「ありがとう」  
「とても美味しいよ」  
「お手伝いするよ」etc  
嬉しい言葉や何度も  
沢山伝えてくれて  
ありがとう。  
子ども一人一人の  
笑顔を大切に  
全員が心の底から  
喜んでくれる日々が  
早く訪れますように



## 模擬授業の動画 ↓

## 模擬授業



1回目

2回目



3回目&おまけ



## Bグループ

### 【授業内容】

- ・日本の四季
- ・理科の実験  
①水と油  
②片栗粉と水  
・買い物  
→お金の計算

## Aグループ

- 【授業内容】
- ・日本の伝統紹介
- ・摩擦とこの原理

## Cグループ

- 【授業内容】
- ・日本の土地（地理）
- ・化学反応

# 図書館作りへの第一歩

## 【気づき】

ガース村で初めての図書館イベントを開催し、子どもたちにとって本が特別な存在であることを改めて実感した。日本では図書館が身近にあり、本を読むことが日常の一部ですが、現地の子どもたちにとっては、本に触れる機会そのものが限られている場合もある。その為、本を手にとったときの子どもたちの反応がとても印象的だった。興味津々にページをめくる姿や、真剣に内容を読もうとする表情から、本の持つ力を感じた。また、本を読むだけでなく、日本語に触れたり、折り紙を作ったり、図書館の看板を作る活動を通して、図書館を単なる本の置き場ではなく、**学びや創造の場として認識**してもらえたことに大きな意義を感じた。さらに、現地の子どもたちと一緒に図書館の飾りつけをする事で、図書館をより身近なものとして受け入れてもらいたい。自分たちが関わったことで、図書館を「自分たちの空間」と思えるようになり、本への興味が自然に生まれることにつながったのではないかと感じた。

## 【課題】

図書館は作っただけで終わりではなく、継続して活用されることが重要である。どうすれば子どもたちが自然に本に触れ、**図書館を日常的に活用できるかを考える必要がある**。例えば、本の面白さを子どもたちが知るように、ただ読むだけでなく、読み聞かせのイベントや、本に関連した遊びを取り入れることができるかもしれない。また、図書館を「勉強する場所」としてだけでなく、「楽しむ場所」として認識してもらおうとすることで、本への興味がいよいよ深まる可能性がある。さらに、図書館を継続的に運営するためには、本の管理や貸し出しの方法を整え、地域の人々と協力して維持できる仕組みを作ることが重要だ。そして、図書館がただの建物として存在するのではなく、子どもたちが「また行きたい」と思える場所になるように、どのような工夫をしていくべきかを考えていく必要がある。図書館をきっかけに、**子どもたちが学びに対する意欲を持ち続けるための環境づくり**が、今後の大きな課題であると感じた。

## 図書館イベント様子の動画



@KUIISS.EDUCATION

図書館の雰囲気  
が明るくなりました。  
子どもたちが本の  
良さに少しずつでも  
気づききっかけに  
なりますように。

